

パネルトーク

山極 寿一×大橋 未歩×原島 博 (コーディネーター)

■大人たちの振る舞いを見て、子どもは学んでいく

原島 山極先生、どうもありがとうございました。これからはわたしと大橋さんと、共同司会を務めさせていただきます。実はわたし、山極先生のお話は何回かお聞きしたことがあるのですが、そのたびに「あ、そうだったんだ」と思うことがあります。今回で言うと、オスの睾丸の大きさと乱交の関係が非常によくわかりました。けれども、今日はあまりその話には入らないようにしたいと思っております。

最後のところで、AIやITが家族や人間をおかしくしているというお話がありました。自己紹介をしていないのですが、実はわたしの専門はITです。厳密にはAIは専門ではありませんが、ITとAIは近いところにあります。ですので、なんとなく、「おまえが悪いから家族がダメになったんだ」と、そんなふう聞こえる話でした。でもこれは非常に重要で、これからますますIT社会になりますから、その中での人と人とのつながりはどうあるべきか、しっかり考えなければいけない問題だと思います。

さて、今日の話は2つに分けられる気がいたしました。ひとつはいわゆるゴリラ、チンパンジーなど人間以外の霊長類に対して、人間がどのように家族を形成し、それがどういう意味を持っていたか。ゴリラやチンパンジーのように、アフリカの熱帯雨林にいれば幸せだったわけですよね。それがサバンナという非常に厳しい場所に飛び出してしまったために、生き残るための戦略が必要になり、その過程で「家族」というものが出てきた。それがひとつです。ところが、そこには素晴らしい戦略があったはずなのに、人間はその後に現代文明というものを手に入れて、それまで獲得してきた「家族」という戦略と矛盾した生活をするようになったのではないかと。そこで、今後どうしたらいいかということになるわけです。それが2つ目です。

そこでパネルトークでも、まず前半は、先生のご専門であるゴリラなど霊長類に関して、人間の家族とは一体何なのかという、なぜそれが必要だったかというテーマで進め、後半は、現代社会において家族がどう変化したのかというテーマで進めようと思います。「やっぱり原島が悪かったよ」という結論になるかもしれませんが……そのような流れで進めようと思っています。

では、まずゴリラのお話について面白かったのは、母親ゴリラからバトンタッチされたあとの、父親ゴリラの子育て。母親とは全然違いますよね。母親と違って腕に抱くのではなく、ひたすら黙ってじっとして、子どもを背中で遊ばせる姿には、存在感が際立ちます。

山極 ゴリラの子どもは3年から4年お乳を吸いますから、4年から5年おきでしか子どもを産めません。すると、次の子どもを産むときは、前の子どもはすでに母親の元にはいないわけですね。基本的にゴリラの母親は同時に複数の子どもを育てません。でも父親は複数のメスから預かった、同じような年齢の子どもたちをたくさん抱えて育てる。ゴリラのお父さんは複数の子どもたちを平等に育てますが、お母さんは1頭のいたいけな赤ちゃんを、とにかく保護して育てることだけに集中します。そこが全然違うところですね。

原島 これから父親の役割というのを話題にしていきたくと思いますが、まず大橋さんの立場から感想をお願いします。

大橋 父親のお話で言いますと、先生のおっしゃった「ドド」に対する父親の接し方を見て、つまり子どもたちは父親を通して、社会というか、集団の中でどう生きていくかを学んでいるのかなと感じたのですが、父親にはそういった側面があるのですか？

山極 ゴリラは優劣をつけるのではなく、互いに対等な社会を形成しています。子どもたち同士でのケンカが起こると、必ず父親が介入して、まず仕掛けたほう、体の大きいほうを押さえます。つまり、父親が大きな抑止力になることによって、身体が大きい子どもでも、身体の小



さい子どもに対して優勢にはなれず、対等なんです。だから子どもたちは、父親に頼る。なぜなら、えこひいきをしないからです。そうやって、ケンカを起こすことが悪いことだと覚えていくのですが、それは子どもの成長にとってすごく重要だと思います。

大橋 それは先ほどおっしゃった、組織の中での対立概念という話にもつながりますね。家族の中では優しくできるけれども、それが共同体の中では矛盾するという。



山極 おっしゃるとおりです。人間の場合はやっぱり家族だけだと、どうしてもえこひいきの集団になってしまうので、それを外に開くことによって、子どもの成長を複数の親たちがきちんと見守る。それが、最近までずっと続いてきたと思うんです。父親や母親が、きちんと外の家族と連携し合っていたから、子どもは家族であると同時に“地域のもの”でもあったわけですね。

原島 今、地域という話が出ましたけれど、確かにわたしの小さいころは、母親にベタベタくっついて、「お小遣いをあげるから外で遊んでおいで」なんて言われました。今はそんなこと言わないですよ。外で遊んでこいなんて、危なくてしょうがない。

山極 あと、大人同士のつながりが、子どもには見えなくなりました。つまり、大人が職場に行って何かしているのはわかるけれども、会社の人たちを家に連れてこないし、近所同士のつきあひもない。昔は近所のお母さん同士で食べ物を交換したり、一緒に掃き掃除などして助け合う様子が、目の前で繰り広げられていたけれど、今はほとんど見えなくなってしまう。子どもが大人同士のつきあひの仕方を覚えることができないというのが、いちばん重要な点じゃないでしょうか。

原島 考えてみたら、そうですね。今は隣の人を知りませんよね。わたしは小さいころは、隣の家に入り浸っていたものですけどね。

大橋 入り浸っていたのですか？

原島 そうですね。だから隣の家の押し入れに何が入っているか、全部知っていましたよ。それが普通だったんです。それが今、ほとんどなくなってきましたよね。先ほど先生が、人間の家族の特徴は複数の家族で共同体を作るとおっしゃいましたが、家族が単独であるのではなく共同体を作るということは、要するに家族同士がお互いを知っているということですね？

山極 そうです。昔の家はあけっぴろげでしたから、隣や向かいの家で起こっていることが

音でも聞こえたり、目でも見えたりです。実は人間の会話の90%はゴシップだと言われてます。つまり噂話。あそこの家は夫婦ケンカしてるよ、とか、ずいぶん子どもを叱ってるね、とか。子どもはその噂話を聞きながら育つことで、何をしたらいいのか、何をしたらいけないのか、何をしたら恥ずかしいのかを覚える。大人たちの言葉やしぐさ、振る舞いなどを通じて覚えていくことが、文化を知る、文化を覚えることだと思うのですが、今はそれができなくなりました。

■人間は脳の中にあるものを外に出してきた

大橋 目の前で繰り広げられる情報と、たとえばインターネットなどで目にする情報とは、違うものですね。

山極 インターネットで見える映像は、自分が身体で経験できるものではないですからね。子どもは、やはり一緒に何かをしなければならないんですよ。お祭りに一緒に出かけ、着飾っている大人たちにウキウキしながらついて歩く、大人たちがケンカをして仲裁する姿を自分もそばで泣きながら見ているとか、そういうことによって、こういうことをしてはいけないのかということを感じていく。それが学習ということなのですが、テレビの映像は自分がすぐそばで体験できるものではないから、やはり、どうしても“向こうの世界の話”になってしまうんですよ。

原島 インターネットを通じて経験を積んだような気にはなっているけど、実際にはまったく違うということですね。

山極 それともうひとつは、テレビやインターネットでは、言葉の力が大きくなりすぎてしまうんです。実際に会ってケンカするのと、インターネット上で言葉でケンカするのでは、激しさがまったく違うわけです。面と向かって「殺してやる」と言われても実際に殺されるとは思わないけど、文字で「おまえを殺してやる」と書かれたら、本当に殺されると思っちゃうでしょう。生の声と、文字に表された化石化した声は違いますよね。

大橋 人類はそういう環境の中で、何百万年にわたって発展してきたけれども、今は転換が行われていると。それは弊害とかゆがみという形で、どこかに出てきているのですか？

山極 人間が進化の過程で一貫してやってきたことは、脳の中にあるものを外に出すことです。見えないものを見せる、聞いてないものを聞かせる、それをずっとやってきた。それが情報通信技術につ



ながっている。たとえば、人間が最初にやったことは食物の分配です。野生動物は、自分が発生源を見ていない食物を信用しない。だから自分の目の前にあるものしか食べません。でも食物の分配というのは、他人に託しているわけですよね。その食物が信用できるかどうかは、その人間を信じることにつながる。食物がどこから来たのか、自分が見ていないものを信じる、想像する。これが、言葉につながっていくのです。言葉というのは、ものすごく効率的なコミュニケーションです。つまり、自然界にあるさまざまなものをカテゴリー化し、石は石として、岩は岩として、小川のせせらぎは流れとして表し、伝える。しかも言葉はポータブルですから、わざわざ石を運ばなくても人に伝えられる。つまり記憶の中にあるものを、言葉に置き換えて運び、人に伝えるということを始めたわけです。それが現在は、どんどん技術が拡大して、世界で起こっていることを同時に映像で見られる時代まで来てしまった。ただ、その映像は、現実に体験できるものとは違います。それをきちんと理解しなければならないと思います。

原島 かなり前に、山極さんから、小さいときに育てていたゴリラと10年ぶりに再会したという話を聞きました。そのときに、相手がじーっと山極さんの顔を見ていたと。要するに、顔をじーっと見るというコミュニケーションがゴリラにはあって、それによって、山極さんのことを「あ、自分はこの人を知っている。お世話になった人だ」と思い出したという話でしたね。

山極 あれはね、10年ぶりではなく26年です。

原島 え!? 26年ぶり? すごい。

山極 再会したとき、最初、向こうはわたしのほうを「何かおかしいな」と思ってチラチラ見るんだけど、まだ思い出してくれなかったんですよ。おそらく、頭の中で昔の経験がぐるぐる回っていたと思うんですが、2日後にまた会ったら、向こうから積極的に近づいてきて、わたしのことをじーっと見つめるんです。そこでわたしがあいさつ音を出したら、向こうが同じように答えた。そこから、彼の顔がどんどん幼くなっていくんです。初めて会ったとき、彼は6



歳だったんですが、その当時の自分に戻っちゃった。声を聞くという聴覚的な情報と、見つめるという視覚的な情報によって戻ったんです。そして、それによって、触覚や嗅覚という記憶も戻ったと思うんです。それから彼は、当時わたしと、くずほぐれつ遊んでいた感覚を取り戻し、近くの子どもをつかまえて遊び始めました。さらに、当時の自分の寝相の悪さを表すように、子どもと同じような寝方をしてみせた。このように、しぐさで示した。身体感覚で昔に戻ったというのが重要なことなのだと思います。

原島 身体というのはある意味では家族の本質なんでしょうね。

大橋 日常的に考えられるコミュニケーションの場は、やはり食卓だと思うのです。けれども今は個食の時代で、スマホを見ながらごはんを食べるのが当たり前になっているため、人の顔や目を見てコミュニケーションを取ることが、なかなか難しいのでしょうか。自分も、下手になっているような気がします。

原島 目を見つめるというのは、けっこう大変なことなんです。たぶん、ずっと見つめ合っていると、きつとどこかで目をそらしますよ。人間の場合、じーっと見つめ合うのは難しい。言い換えると、それが顔なんです。テレビやスマホを見ながら食べても、たとえばテレビに映っている顔は、ずっと見つめていても全然恥ずかしくない。

山極 それはテレビに映っている顔が、自分に反応してくれないからです。反応し合うことが重要なのですね。

原島 互いにね。

山極 顔というのは、その人の個性とともに気持ちを伝えます。でも相手の顔を読む力というのは、われわれには生まれつき備わっているもので、習わなくてもできるんです。だけど言葉というのは意味を伝えるものだから、ちゃんと習わなくてははいけませんね。

原島 それからもうひとつ面白かったのは、音楽の話。まさに音楽というのは感情を共有できるもので、言葉が生まれる前に、親と子や共同体をつなげるものとしてまず音楽があったということですね。

山極 音楽というのは、身体をつながりやを補強するものとして現れたのだと思います。なぜなら、言葉を発するための身体的能力ができたのは、人間が二足歩行を始めたからだと言われるんです。立って二足で歩くと喉頭が下に降りて、そこに空隙ができ、音を調節する機能が発達します。だから、ハイハイしている赤ちゃんは喉頭がまだ上にあるので、「あー」とか「うー」とかしか言えないわけです。でも二足歩行を始めると、子どもでも言葉を発するようになる。そういう意味では、人間の子どもは、人類の進化を繰り返しているわけですね。でもわたしは、二足歩行は言葉を話す機能より前に、“踊る身体”としての機能を発達させたのだと思います。なぜなら、立つと、上半身と下半身を別々に動かすことができ、支点が上になるから、踊れる

身体になるんですよ。さらに、四つ足で歩いていると胸が圧迫されますが、二足歩行になって胸が楽になると、いろいろな声を出することができるようになる。それが歌につながった。歌を歌って身体を同調させることは、とても重要だったと思うんですね。

原島 それを聞いて、これから家族がうまくやっていく秘訣は、家族でカラオケに行くことなのかと思ったわけですけども（笑）。言葉でコミュニケーションすると、どこかでおかしくなるということもありますよね。

山極 どんなに立派な政治家でも、ミュージシャン以上に人を集められないです。しかもミュージシャンは、あの何万という大観衆をひとつにできる。これはすごいですよ。音楽の力です。

原島 どんなに立派な大学教授の講演でも無理ですかね。

山極 そうですね（笑）。

■文化と自然との賢い両立が家族の原点

原島 ではここで、現代社会の話に変えたいと思うのですが、基本的に先生のおっしゃる家族



の崩壊が始まった現代社会というのは、日本では戦後ということでもいいでしょうか。

山極 そうです。戦前はまだ電話ぐらいしかありませんでした。FAXもテレックスも、スマホもインターネットもなかった。まだ人間が生で通じ合っていた時代です。映像と聴覚を拡大してしまったことが大きいのかなという気がするんですけどね。

原島 放送業界にいる大橋さんは、責任あるよね（笑）。

大橋 そうですね。ただ先ほどの先生のお話の中に出てきた、AIに家族が作れるかということに関してですが、AIの特徴

を見ると、逆に人間がAIに近づいていっているような気がしてしまうのですね。生涯未婚率も上がっていますし、たとえば恋愛はしたくない、経済的に合理性がないとか、そういうことを言う人たちも増えてきています。AIと人類は分けられるのか、むしろ、もしかしたらわたしたちの将来の姿がAIなのかもしれないと思ったりもしました。

山極 おっしゃるとおりで、現代の人間の人工的環境は、人間の身体とミスマッチを起こしています。それが慢性疾患や糖尿病、高血圧症などいろいろな身体の病気として現れているわけです。たとえば、人間はもう長い距離を歩かなくなったし、毎日のオフィスでのデスクワークで座っている時間も長くなった。しかもインターネットの画面を見ている時間が長くなり、なおかつ睡眠時間も減っている。視覚をものすごく使っているということです。それから、食べ

物もガラッと変わりました。今は炭水化物をいっぱい食べますよね。糖分の多いケーキも食べる。すると、それを処理する肝臓や膵臓の能力が追いつかず、どんどん脂肪に変わって内臓脂肪がたまり、肥満になる。これ、わたしのことなんですけどね。そういうことが、やはり慢性疾患を生んでいるのです。同じことが社会にも起こっているんじゃないかという気がします。

原島 効率化を求めるとだんだん社会自体がAIっぽくなり、人間自体がAIに近づいているということですね。先ほど、AIは性的欲求がない、恋愛ができないという話がありましたけれども、AIは人間に対して恋愛はしないけれども、AIに恋愛している人間はけっこう多いですよ。生の人間は自分の言うことを聞いてくれないけれども、バーチャルだったら聞いてくれるし、ニコリ笑ってくれる。人とつきあうよりもコンピュータとつきあっていたほうが癒やされるという人が、だんだん増えているような気がします。

山極 人間同士だと予想外の相手の反応がありますが、AIは自分でコントロールできますからね。たとえばAIに、いつでも「わたしはあなたが好きよ」と言ってもらえれば、すごく気分いいですよ。それは、個人の欲求を最大限“発揮させる”ような社会を作るという、今の自由主義社会という方向に合っているから、AIは今後もどんどん発展していくはずですよ。ただAIは絶対に人間を好きにならず、特別な感情を抱いたりはしません。データを基に「このおじさんはどういうものが好きなんだろう」と解析して、それに合うようなものを出してくるだけです。それは個人にとっては満足を与えるものかもしれないけれど、有害なんですよ。なぜなら、環境と身体の不マッチというのは、人間が望むものを作り出してきかぬゆえに起きたことでしょう。お菓子や炭水化物をたくさん食べて肥満になった結果、自分に跳ね返っていろいろな病気にかかる。だから、それと同じことが起こる可能性があります。自分の望むことをAIが全部してくれるような環境を整えると、直観力も共感力も使わなくて済むし、単に、自分の好きなことは何かを優先させて考えるようになるから、非常に利己主義で、個人主義になって、最終的には社会を壊す行為に結びついていくと思います。

原島 おっしゃるとおりだと思うんですが、AIの研究者の立場から言うと、それは低レベルのAIですね。本来の人工知能、つまりAIは、人間のいちばん素晴らしい知能を真似て、いちばん素晴らしい感性を人工的に作ることを目指している。だからわたしは、人類を減ぼすようなAIは、低レベルというか、悪AIだと思っているわけですけど、その議論はまた別のときにやりましょう。

山極 大橋さんに聞いてみたいのですが、家族というのは、男性と女性の、どちらの強い志で作られていると思いますか？

大橋 そうですねえ、今日はたまたま、わたしの義理の両親が会場に来ているのですが……（笑）、わたしは女性かな、と思いました。

山極 そう答えていただいて大変うれしいんですけど、それはこの先、男がいらなくなるといことなんじゃないかと思うんです。

大橋 男がいらなくなる？

山極 ええ、つまり IPS 細胞などの生殖医療が発達すると、精子を体細胞から作り出すことができるようになるんです。だから女性は、自分が望むような赤ちゃんを、何歳になっても産めるようになる。男なんか、いらないでしょう。男として、わたしはそれを非常に危惧しています。女性が家族を作りたいと思う根底には、夫や父親というのも含まれるとは思いますが、それを女性が欲してくれなくなったら、われわれ男は終わりです。男は、女性が欲してくれるように振る舞っていかなくてはいけないですね。

原島 戦後の家族は、男や父親がいなくなりましたからね。父親なしで子育てをするというのが普通になってしまった。ただ、これがもしそのまま進んだら本当に男はいなくてもいい、という結論になってしまう。今日はそれで終わりにしたくないんですけども。

山極 面白いのは、わたしは昔『ようこそ先輩』という NHK の番組で、母校の小学校に行ったことがあるんです。そのときに 6 年生のクラスで、男の子に「女の子に好かれるにはどうしたらいい？」と聞いたら、男の子が全員一致で「優しくなることだよ」と言うんです。そこで



女の子に改めて聞いたら「強くなくちゃ」と言うんですよ。これ、完璧なミスマッチなんですよ。そういうのが人間社会なんですよ。何が言いたいかというと、相手の望むことをいくら考えても正解にはたどり着かない。原島先生がおっしゃったように、家族にも正解がないんです。おそらくみんな、ミスマッチな家族ばかり作っているん

ですよ。だけど、それをなんとか自分なりに作り上げていく過程こそが「家族」なんですよ。年を取れば好みも変わっていくし、子どもができればトラブルも増える。でもそれを乗り越えなければ、いや、「乗り越えたい」という気持ちかな、それがないと、家族という、ある意味で生物学的な組織というのは維持できないと思うんです。家族は一面では人間が達した大きな文化だし、もう一面で人間が進化の中で獲得した生物学的な特徴を大いに背負っていることは忘れてはいけません。私の想いです。

原島 今日の先生のお言葉で、共感力というのが非常に印象的だったんですけども、共感というのは相手があつてのことですよ。だから今、共感力がなくなっているとすれば、ひとつはやはり、家族がおかしくなっていることの結果ですよ。

山極 おっしゃるとおりだと思います。特別な相手に特別な共感を寄せるということが、人間の持っているアイデンティティなんですね。わたしは、家族は男と女が作るものだけじゃないと思っています。同性の家族があつても、子どもがいなくても、片親だけの家族があつてもいい。大切なことは、特別な共感を寄せる相手を持つことです。そして、そこに存在する年齢差や知識の差を互いに補い合うことが当たり前に行われるのが家族であつて、損得勘定や、利益云々の話は出てこない。それが家族の特徴なんだと思います。

大橋 山極先生のお話の最後に、二重生活というお話がありました。二重生活をして自然に触れるということと得られるものが、共感力や直観力を高める現実的な方法なんですね。今、たとえば土に触れるようなイベントが増えていますが、それはわたしたちがどこか潜在的なところで危険を感じていて、それにあらがおうとしているということなんですか。

山極 今、地方創生とか、東京一極集中の解消だとか言われていますが、東京で互いに助け合うような共同体というのは、なかなか作れないと思うんです。やはりこんな巨大な都市だと、効率性や経済性を重視する組織が優先されてしまう。もっと落ち着いた時間の中でしか、人間の持っているゆっくりした生物学的な時間は作れないと思います。だったら東京でそのようなものを無理に作るよりは、ゆったりした時間が流れている地域に求めたほうが得策ではありませんか、と思うんです。それが二重生活のすすめです。

原島 二重生活というと、なんだか、どちらにもいなさやいけな思ってしまうんですが、たとえば 1.1 生活はどうでしょうね。0.1 ぐらいなら、気軽にできるかな。山極先生、最後にこれだけはおっしゃりたいということはありませんか。

山極 やはりわれわれは、“生物”だということですよ。生物である以上、自然を感じる心を持っている。ですから、それを感じる情緒というものを忘れないでほしいですね。情緒は、すごく大事なものだと思います。赤ちゃんにとって、それを最初に共有できる経験が、親であり家族です。それをしっかりと与えなければ、人間はできません。人間は文化的な存在であると



同時に、自然的な存在でもあるから、その両方を子どもにも知ってもらわなければ、きちんとした人間はできないということを忘れないでいただきたいと思います。

人間とゴリラ、つまり文化と自然の世界を半分ずつで生きている立場で言うと、人間が住む文化の世界は、人間がコントロールする、あるいは環境によっては人間がコントロールされる人為的な世界です。そこで人間は、ものすごくこだわりを持つ世界を作ってしまった。そのこだわりがいろいろな弊害を生んでいます。でも逆に言えばそのこだわりが、新しい技術やイノベーションを生み出してきた。一方、ゴリラの世界は諦めのいい、さっぱりとした世界なんです。なぜなら自然環境というのは勝手に変わるから、こだわってはいられず、だから諦めがよくなるんです。わたしは早く向こうに帰りたいという気持ちもあるんですが、大事なのは、文化と自然を賢く両立させていくこと。人間は文化のほうにいるから諦めきれないんですが、そのバランスをこれからどう取っていくか。その原点に家族がいるんだと思っています。ちょっとかっこいいことを言い過ぎましたね。

原島 かつこよすぎて、次回の3回目はどうしようかなと思うわけですが、今回のシンポジウムが家族について考えるいいきっかけになればと思っています。山極先生、どうもありがとうございました。



大橋 未歩

1978年8月15日生まれ。兵庫県出身。元テレビ東京アナウンサー。1992年テレビで観たバルセロナオリンピックで、金メダルに輝いた競泳岩崎恭子選手の姿に感動し「五輪にかかわりたい！」という夢を抱きマスコミを志す。1995年阪神淡路大震災で被災。3週間お風呂に入れない生活を経験する。2002年テレビ東京入社。念願叶い2004年アテネ、08年北京、12年ロンドン五輪でキャスターを務める。他には『世界卓球』のキャスターやバラエティ番組『やりすぎコージー』などを主に担当。2013年34歳の時に脳梗塞に罹患し8ヶ月休養。復帰後は朝の経済番組など報道を主に担当。そして2017年、15年勤務したテレビ東京を退社。現在は第2の人生をどう楽しもうか模索中です。



コーディネーター

原島 博 (東京大学名誉教授)

1945年終戦の年に東京で生まれる。2009年3月に東京大学を定年退職。東京大学では、工学部および大学院情報学環に属して、人と人とのコミュニケーションを、リアルとバーチャルの両側面から技術的にサポートすることに関心を持ってきた。その一つとして、人の顔にも興味を持ち、1995年に「日本顔学会」を発起人代表として設立、「顔学」の構築と体系化に尽力してきた。科学と文化・芸術の融合にも関心を持ち、文化庁メディア芸術祭審査委員長・アート部門審査員、グッドデザイン賞 (Gマーク) 審査員などもつとめた。現在は東京大学名誉教授、2015年12月より再び特任教授として東京大学に戻り、全学共通の文系・理系を横断した大学院教養講義を担当している。

公益財団法人花王芸術・科学財団 評議員。

(撮影：中村 年孝)

公開シンポジウム

「これからの家族を考える」シリーズ第2回

発行 公益財団法人 花王芸術・科学財団

〒103-8210 東京都中央区日本橋茅場町 1-14-10 (花王ビル内)

Tel : 03-3660-7055 Fax : 03-3660-7994

編集 公益財団法人 花王芸術・科学財団 事務局

発行日 2018年2月1日